

第十四回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

岡野 弘彦 著『折口信夫伝 その思想と学問』

(2000年9月10日 中央公論新社 刊)

岡野 弘彦 おかの ひろひこ大正13年(1924)生まれ。三重県出身。短歌創作。専攻は国文学。国学院大学国文科卒業。在学中より折口信夫の家に同居して、その没年まで七年間、国文学、民俗学、短歌創作の薫陶を受ける。国学院大学栃木短期大学学長(受賞時)。現在は国学院大学名誉教授、日本芸術院会員。著作は、『折口信夫の晩年』、『折口信夫の記』、『神がみの座』、歌集に『冬の家族』、『蒼浪歌』、『海のまほろば』、『天の鶴群』、『飛天』、他がある。個人雑誌「うたげの座」を季刊で発行。

受賞のことば

このたび、栄えある和辻哲郎文化賞をいただくことになり、深いよろこびを感じています。中学生の頃、この人の文学と学問を心ゆくまで学んでみたいと思いたってから、折口信夫は私の生涯の師となりました。しかし、師の生前から没後の年をかさねて幾ら努めても、その学問は容易に理解のおよばぬ奥深さと多様さで眼前に立っていました。その堅固なものが心になじみ始めたのは、師の没年を越えた頃からでした。この歳月を先生はもう生きなかったのだと思うと、学問の奥に流れる執着深い情念が、私の胸の中にも次第に伝わり、よみがえってくる気持ちになりました。

そんな思いで書きついだこの書物が、由緒ある賞を受けたことを感謝いたします。

すたれゆく世をかなしめる師の歌の
なげき伝へて老いにいたりぬ

山折 哲雄 著『愛欲の精神史』(2001年7月20日 小学館 刊)

山折 哲雄 やまおり てつお 昭和6年(1931)生まれ。岩手県出身。専攻は宗教学、思想史。東北大学文学部印度哲学科卒業。同大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。国際日本文化研究センター所長(受賞時)。現在は国際日本文化研究センター名誉教授。著書は、『死の民俗学』、『近代日本人の宗教意識』、『近代日本人の美意識』、『悪と往生』、『悲しみの精神史』、他がある。

受賞のことば

有難いことだと思います。心から嬉しく思います。私はこれまで和辻哲郎からじつに多くのことを学んできました。その人柄を尊敬し作品を愛してきました。ものを考えるときの大きいなる目標、人生を越えていくときの貴重な道しるべでした。ときに、自分の狭い自我に抗しきれずにその世界から離反し、和辻哲郎の心臓部に刃を向けたこともありました。しかしそのような振舞いに我を忘れていたときも、和辻哲郎は私にとっていつも変らぬ心の灯でした。どちらかというと私は、和辻哲郎における倫理学や思想史の仕事よりも美の追求者としての生き方に共感し、美の耽溺者としての仕事の方に心を奪われてきました。美しいものの中にこそ人間の真の強さがひそんでいるということを教えられてきました。今、そのことをしみじみと嘯みしめているところでもあります。選考委員の先生には心から感謝の気持ちを捧げたいと思います。

《選考委員評》

偶然ではない二作受賞

陳 舜臣

山折哲雄氏の『愛欲の精神史』は、ほぼ八年にわたって連載された、きわめて意欲的な作品である。じつはこれと平行するように、私は山折氏の『近代日本人の美意識』を読んでいた。こちらは日文研や岩波の諸誌に一九九五年から一九九九年に発表された諸篇で、私はこちらが最終候補作になると予想していたが、おなじ二〇〇一年に発行された『愛欲の精神史』になった。いずれも山折哲学の山塊であることは同じである。

インドのヴァーラナシから始まった思索の行脚は、後深草院葬送の場面あたりで終る。だが、山折氏はふるさとを同じくする宮沢賢治まで、その旅をつづけるのが本来の予定であったという。

予定まで辿りつけなかったのは、登場するキャラクターが多すぎたのも一因であろうと思う。インドから始まったのだから、釈迦とガンディーは欠かすことができない。それでも読者として私は、ガンディーが彼の道場でバイブルだけではなく、コーランまで唱えられたこと、また彼の暗殺の原因であったイスラム教徒との融和を、宗教学的に解明してほしいという不満も残る。もちろんそれは「愛欲」という中心テーマからはずれることが遠すぎたのであろう。「愛欲」がテーマなら玄奘の高弟で、『大唐西域記』を撰した辯機が、高陽公主と通じて誅殺されたいきさつも知りたいと思う。山折氏はこれからも、テーマをさらに深められるであろうから、今後の仕事がたのしみである。

岡野弘彦氏の『折口信夫伝』は、親しく教えを受けた氏にしか理解できない面があり、氏が「面白い伝記になり得ているとはとても思えない」と謙遜されているにもかかわらず私には興味尽きない伝記であった。

折口はその死に至るまで考えつづけたのは、日本の神を、一民族教の神から、人類教の神にしようとする事への模索であったとしている。そして、折口の最後の講義は、日本の古典や習俗の上に伝える神は、大和族の祭る高天原系の神より、すさのを・大国主のような出雲系の神に、より宗教的要素が濃密にさぐり出せるとする方向に焦点がしぼられたとする。

なお折口の天才的な古代への溯源力や復元力に基づく学問の、説得力のある解説のなかに、戦死した養子春洋との深い精神的な結びつきが、違和感なしに語られている。やはりこれは岡野氏ならではの書けなかった文章であると思う。

折口は文学の発生の根元は寂寥のなかにあったとする。今回のもう一人の受賞者山折哲雄氏は、その寂寥の深淵を感謝や歓喜の表層的な水面へと浮上させてしまったのが仏教なのであった、と述べている。(山折哲雄『物語の始原へ—折口信夫の方法』)

このことは岡野弘彦氏も、今回の受賞作のなかでも引用している。(三六八頁)

今回の二作受賞は、けっして偶然ではない。

梅原 猛

今回の和辻哲郎文化賞の第一次選考で残り、われわれ選考委員のところへ届けられた六編の作品のうち、四編はいずれも力作で、落とすには惜しい作品であった。それで選考委員の間で多少異論があったが、結局、二編が受賞ということになった。落とされた作品のなかにも例年ならば受賞していたであろう作品があり、選考委員としても残念に思った次第である。

山折哲雄氏の『愛欲の精神史』は、氏が七年の間、季刊誌「創造の世界」に連載したものを集約したものであり、中編の著書に傑作の多い氏にしては例外的に長編の作品である。そこで山折氏は愛欲をテーマにしているが、宗教学者である氏のねらいは、愛欲と救済との深い関係を明らかにすることであろう。この問題は、多くの宗教学者によってほとんど触れられていない問題である。山折氏はこの著書で大胆にこの問題に答えようとしている。宗教には必ずエロスが存在するが、エロスがどのような形で悟りに変化するのか。こういう問いを山折氏は執念深く問うている。

山折氏の知識は日本からインド、ヨーロッパに及び、関心は宗教を中心として芸術や文学、大衆演芸にまで及ぶ。この広い知識と関心をもつ山折氏の愛欲についての考察は多くの卓見に満ち、縦横無尽であるといえる。

特に私が興味をもったのは、マックス・ウェーバーとD・H・ロレンスの恋人であった二

人の姉妹の女性についての考察と、そのような美しい恋人によって、マックス・ウェーバーとロレンスの思想がどう変わったかという問題の論及である。

またガンディーを取り巻く人間、息子及び彼を深く愛し、しかも恋人になれなかった女性の運命の考察など、甚だ興味深かった。この書は好著であるが、恨むべくは七年にわたる連載のせいであろう、多少テーマが分散し、統一性に欠けることである。

それに対して岡野弘彦氏の『折口信夫伝 その思想と学問』はみごとに統一のとれた作品であるといえる。折口信夫は、近代日本の学者のなかでもっとも深い謎に満ちた人間であることは間違いなからう。彼の思想は甚だ独創的あるいは独断的であるが、彼の生活にもその奥に深い魅力的な闇をもっている。彼が一生独身であり、ソクラテスの如き同性愛の趣味をもっていたことは明らかであるが、岡野氏は最晩年の折口にもっとも近い弟子であった。

折口信夫については、最近、小説家である富岡多恵子氏によって男色の謎に迫った興味深い書物が書かれた。それは折口から遠く離れた女性作家の想像力から生まれたおもしろい小説であろうが、やはり折口を知るには、折口にもっとも近い弟子の語った折口信夫論を信頼すべきであろう。

岡野氏は何度か師、折口信夫について語っているが、今度の著書はその折口信夫論の総決算といってよい。折口の死後四十年にして、折口の最愛の弟子の一人であった岡野氏は、師、折口信夫を初めて客観的に眺める立場に立ったといえよう。

この書には、折口を尊敬の目でみながら、折口の奇行をはっきり見つめる目がある。奇人としかいえない折口とこの礼儀正しい弟子、岡野氏との関係が読んでいておかしくかつ微笑ましい。きっと墓の中の折口もこの書物を読んで、わが弟子もここまで成長したかと喜ぶにちがいないと私は思う。

中野 孝次

今回は力作がそろい、選ぶのが難しかった。六点中わたしが推したのは、岡野弘彦『折口信夫伝』と猪瀬直樹『ピカレスク』の二点。ツベタナ・クリステワ『涙の詩学』も力作で、これも推したかったが、推及する主題「袖の涙」が専門的すぎるのではないかの問題があり、一般部門の受賞作には取上げられなかった。わたしはこれを専門書の部に推薦したのだが、そちらで取上げてもらいたかった。

岡野弘彦「折口信夫伝」は、著者が最も敬愛する師について書いた評伝で、折口について熟知しているのは勿論だが、何よりも書き方がみごとなのに敬服した。大抵、師について書くときはべったりとくっついて書きがちだが、これは対象に対する距離のとり方が絶妙だ。著かず離れず、進みつ戻りつ、まことに自由に折口信夫の内面を描き切っている。とくに戦後の折口信夫の精神像をこれだけいきいきと描いたものは、これが初めてではなかろうか。

敗戦が折口信夫に与えた影響、折口の中にあるブラック・ホールの指摘、春洋が折口信夫に対し持っていた意味など、今まで誰も書かなかった新しい発見がある。しかも抽象的な論として論じるのではなく、生活を共にした著者の体験を踏まえて語られるので、話が具体的で、面白く、説得力がある。

「折口の生活律が、現代にあるべき日本人の古代性を、未来かけて我がものとして生きようとする新鮮な情熱の発見のためのものであるということがわかると、そばに居て共に緊張を持続してゆくことがむしろ楽しかった。」

すべての点でこれは、折口信夫晩年の生を共にした著者でなければ書けなかった、貴重な証言である。と同時に、それから半世紀たって、著者自身が老境に達して得た自由な物の見方によって初めて書かれ得た、折口信夫像である。この折口論については三選者とも意見が同じだった。

わたしには前年度の受賞作があまりに専門に偏していたことへの反省があり、今年は一般向けに書かれたものを選びたいと決心して事に当たった。それがツベタナ『涙の詩学』を取上げなかった理由だったが、中で『折口信夫伝』のほかに最もその要求をみたすのは猪瀬直樹『ピカレスク』であると思われた。

これは従来の太宰治論とちがって、とらわれぬ目で太宰治の自殺を検証してみようという

試みである。材料の取上げ方と判断に独自のものがあり、玉川上水で死体が発見されたときの状況の検証もきわめて徹底している。論じ方も徹底している。井伏鱒二が太宰の自殺にどう関わっていたかの検証は、従来誰も踏みこまなかった所まで踏みこんでいる。何よりも論全体がキビキビしていて小気味よい。以上の理由からわたしはこれを推薦したのだが、陳・梅原両委員の賛成が得られなかった。また、その反対の理由にも尤もな所があるので、わたしもあえて主張しなかった。

問題は山折哲雄『愛欲の精神史』である。これは非常に欲張った壮大な論で、著者がインドに魅せられたことから始め、ゼロと空の思想、インドのエロスと神秘などまず「性愛と狂躁のインド」を論じ、ついでガンディーのインド、非暴力と断食に及ぶ。さらに空海の密教的エロスと源氏物語に転じ、最後に「問はずがたり」のエロスに行く。大変な力作だが、わたしには論旨が必ずしも有機的に一つになっていないと見えた。また論旨の結びつき一たとえば空海の密教と源氏物語一が、強引すぎる所もある。文章にも難がある。

以上の理由からわたしは、力作であることは認めながら、推薦はしなかった。今でも、もつとしばって書けばよかったのに、と思っている。